

メリークリスマス

吉田敦美

ここはあまりに白い山なので、ふみしめても
ふみしめても沈まない月が

湖に反射している

もみの木が揺れ、途切れ

わたしの代わりに生きてゆこうとする

毎日起きて、食べて、排泄をして

かたちばかりの義務をこなして

寝ることに飽きていたわたしは

もみの木になってみることにした

ことばでいうのは簡単だったが

もみの木のからだになるのは

たやすいことではなかった

皮にくるまれて

息がくるしい

技を伝授してくれなかったから

幹のわりに葉っぱがたくさんだから

視界のすみで

かつてわたしだったものが

きちよりきちよりと遠ざかってゆくのを

血まなこのようなもので捉える

背中にもみの葉を生やして

慣れないからだを揺らして

落葉は白さに覆われて

もつとうまく歩けるだろうと

言おうとしたときにはもう息が

できるようになっていて

もみの木だと思っていたものは

湖で割れた氷の板で

白さにぬかるんだ足を

抜きながら進むわたしの肩は

なんだかとてもうれしそうだった